



Book Talk

編集・発行 海南高校図書館
第3号 2009.06.12.

城山三郎 『男子の本懐』

兒玉先生からブックトークを書いてくれないかとお話を頂き、本のお話をさせて頂くことになった。最初はみんなに少しでも本を読んでもらおうと最近人気のある作家の本をと考えたけど、せっかくの機会やから僕の心に残る本との出会いを話したいと思った。



僕は高校卒業後、たいして勉強もしなかった結果、浪人することになった。周りが優秀だったのと変なプライドから地元に残って勉強するのが本当に嫌

で、親に無理を言って京都の予備校で寮生活をさせてもらった。高校生までの僕は、それなりに上手くいっていたと思う。勉強もそこそこできるつもりだったし、テニスもそこそこ強かったし、友達にも恵まれていた。将来自分が何者になるかということは考えたこともなかったけど、漠然とこのまま自分だけ

うまくいくと信じてた。

しかし、結果は不本意な浪人生活だった。その時の僕は本当に幼く、この現実を受け入れがたく感じて、京都に行っても勉強もせずにぼーとした日々を過ごしてた。小学生も中学生も、高校生や大学生や社会人なども、すべての人には役割があるのに自分はその役割の外に出てしまった、社会の枠外に出てしまったなどとばかり考えてた。また、なぜ勉強するのか、勉強する意味も全くわからなかった。



そんな中、出会ったのが城山三郎の『男子の本懐』だった。徳島から出て寮生活をしてた子の父親が時間があるんだから読んでみたらと送った本の中の一冊で、僕は「読む暇があるなら勉強するわ」と言った彼から本を借り、暇に任せてとりあえず読んでみた。そのころは城山三郎という人がたいへんすばらしい作家だということを、全く知らなかった。

内容は内閣総理大臣浜口雄幸、大蔵大臣井上準之助の生涯を描いている。二人とも緊縮財政と「金本位制」への復帰を行い、結果的には志半ばで暴漢に襲われ、命を落とす。本のタイトルは浜口雄幸が首相に就任する際に家族に言った「すでに決死だから、途中、何事か起こって中道であられるようなことがあっても、もとより男子の本懐である」という言葉からきている。

経済史的には浜口や井上の施策は失敗だったという人もいる。しかし、その時その時に自分が考え得る精一杯の判断をし、一日一日を命がけで生きた人の姿が描かれていて、本当に感動した。そして、何もやっていないのに偉そうに悩んでいた自分自身が恥ずかしく、あほに思えた。

僕は人間は「出会い」が全てだと思う。今もこの人と出会えて良かったとか、この生徒と出会えたからこそ成長できたと感じる。でも大切な出会いは、なにも人だけではない。

それからの僕は、とりあえずくよくよ悩むことをやめた。相変

わらず、それほど勉強はしなかったけど日々充実して「今」を大切に京都で遊んでいたと思う。僕と城山さんの本との出会いは偶然だったけど、みんなには「出会い」を待つだけでなく、たまには能動的に「出会い」を探してほしい。

(国語科 藤下 法紹)



「道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。」という有名な冒頭から始まるこの小説は大正15年に発表された。「孤児根性」に悩む主人公が伊豆で踊子と出会い、旅芸人たちと旅をともにするのである。

私は高校生のとき、この小説の情趣あふれる伊豆に魅され、踊子たちのように旅をしたいと願っていた。その夢が今年の夏、叶った。

行程は旅芸人たちと同じ、修善寺から湯ヶ島、天城を越えて湯が野、そして、下田が終点。湯ヶ島あたりから湯が野までは「踊り子歩道」(約16.2kmのハイキングコース)を歩いた。真夏だったので、全く人を見かけない。背の高い木々に囲まれた、川沿いの道を進んでいくので車の音などしない。ただ澄んだ川のせせらぎが聞こえるだけだ。「浄

化」という言葉が頭に浮かんだ。

途中、康成が滞在していた旅館や、井上靖の旧邸に寄った。私は当時、靖の本を読んだことがなかったので何の感動もしなかったが、最近、彼の『あすなろ物語』を読み、湯ヶ島の描写があったので、興味を持つようになった。また訪れたいと思う。

上記した『伊豆の踊子』の冒頭のような雨は「私雨」(わたくしあめ)というらしい。山岳に多い天候で、まるで自分にだけ降っているかのような狭い範囲に降る雨のことだ。幸い、天城で私雨に追いつけられることはなかったが、終着駅の下田では大雨に降られてしまった。ゆっくりする間もなく、帰りの電車へ飛び乗った。車窓に打ち付ける雨粒を眺めながら、水の描写が多い『伊豆の踊子』をまねた旅の終わりにふさわしいなどぼんやりした頭で考えた。(教育実習生 大田里美)

(編集部より) 今回のBOOK TALKは、かつて3年D組の担任と生徒として魂を合わせたお二人にご登場いただきました。特に大田先生には、授業の準備にお忙しい中、快く原稿をお寄せいただき、ありがとうございました。編集部の怠慢により、他の実習生の方々への取材ができなかったうえに発行が遅くなったことお詫びします。実習生のみなさんのご健康と今後のご活躍を祈ります。



青春時代と読書

藤下先生(国語科) 大田先生(教育実習生)

川端康成 『伊豆の踊子』